

日本語学習者による聴解ディクテーションに現れた誤りの分析 —文法および音声的側面に焦点を当てて—

フォード丹羽順子

要 旨

聴解、読解といった受容面における学習者の能力を知ることは困難である。聴解において日本語学習者がどのように聞いているか、を知るための一手段として、ディクテーションをさせた。学習者にテレビ番組からとった音声テープを渡し、何度でも繰り返し聞いてよいとして、スクリプトの部分ディクテーションをさせ、そこに出てきた誤りのデータを整理、分析した。

その結果、1)文法力の弱い学習者ほど、音声を優先させてしまうこと、2)言葉の実質的意味は聞き取れても、文法的意味が不正確であること、3)文法項目が複合した場合、どれか一つしか認知できないことが多く、さらに、そこに音のくずれ(音変化等)が伴った場合、困難がいつそう増すことが分かった。

【キーワード】 ディクテーション 誤り 音声処理能力 文法的意味 実質的意味

An Error Analysis of Dictation by Japanese Learners : on the aspect of grammar and phonology

Ford-Niwa, Junko

It is difficult to check the receptive-skill ability of learners of Japanese. As an attempt to check listening skills, dictation was used. The students listened to a tape recorded from a TV program, and did dictation of part of the script. They were able to listen to the tape as often as they wanted to.

Analysis of the dictation data shows that 1) the students whose ability of grammar is low tend to rely on the sound rather than grammar and meaning when transcribing, 2) though they are able to grasp the meaning of a sentence, they fail to understand the grammatical meaning, 3) when grammatical items are complex, they tend to identify one of them, and also that the difficulty increases when phonological difficulties are involved in these items as well.

1. はじめに

聴解、読解といった受容面における学習者の能力を知ることは、話す、書くといった発表能力を見るのに比べ、はるかに困難である。受容能力を見るためには、その他の発表能力に頼らざるをえない。一般には、内容理解を問う設問を設けたり、要約をさせたりという方法がとられているが、その際に別の能力を学習者に要求している。聴解におけるディクテーションも一つの方法であるが、正しく聞けているにもかかわらず、正しい表記ができない場合もあれば、逆に、正しくディクテーションできることがそのまま正しく理解していることを意味するわけではない。しかし、それでもディクテーションは学習者がどのように聞いているかを知る手がかりになるであろう。

中上級レベルの学習者に、テレビ番組からとった音声テープを何度でも繰り返し聞いてよいとしてディクテーションをさせ、そこに現れた誤りを整理し分析を行った。ディクテーションの研究は、英語教育においては多数見られるが、日本語ではまだ少なく（新屋1993、中込1995）、それらの研究では、聞かせる回数は1回ないし2回、また聞かせてすぐディクテーションをさせるため、学生にとっては、短いポーズ以外には時間的余裕もなく、記憶力も関係してくる。また、未知語が含まれていることが前提になっている。これに対し、本研究では、テープを何度でも繰り返し聞いてディクテーションさせるものであり、語彙リストを渡している。それでもなお聞けない部分は何か、またどのように誤って聞いているか、を探るところに、この研究の特徴がある。

ディクテーションは、比較的テキストに左右されない文法項目部分を中心に部分ディクテーションをさせた。その結果、1) 文法力の弱い学習者ほど、音声を優先させてしまうこと、2) 言葉の実質の意味は聞き取れても、文法的意味が不正確であること、3) 文法項目が複合した場合、どれか一つしか認知できないことが多く、さらに、そこに音のくずれ（音変化等）が伴った場合、困難がいつそう増すことが分かった。

2. 誤りの種類

作文、会話における誤り分析の研究に比べ、聴解における誤りの分析はそれほど多くない。発表能力を見る場合、学習者の表現意図と、現れた誤りを結果として分析することの差はあるにしても、当該能力だけで行うことができる。受容面の聴解能力を見るために、学習者の頭の中を覗くことはできない。どう聞いたかをディクテーションさせた次の場合を見てみよう。

これは、男性の編集長と女性の部下が、休みにドライブに行った時の会話であるが、部下が「編集長」と呼んだのに対して、「編集長はやめてくれないかな。仕事で来ているわけじゃないんだから」というところがある。下線部を「仕事出ている」と書いた学生が何人かいた。文脈を考えないで、仕事と聞くと「出来る」という連想をしてしまうのであろう。「仕事できている」と書いた学生が、どちらの意味で理解しているかは、ディクテーションからは分からない。

また、「仕事できている」や「仕事できている」というものもある。詳しくは後で述べるが、学習者の日本語能力が低い場合、正しい表記が困難で、特に動詞の活用形における誤りが多く見られる。このよ

うに、ディクテーションは書くという発表能力を含んでいるため、前述したように、正しく理解はしていても（ある場合には不注意から）表記に失敗をしてしまう場合もあれば、逆にディクテーションはできていても、意味は理解していないこともある。

次に、表記の正確さということについて考えてみよう。

結婚式に「出席させていただくわ」という文で、「させて」が正しく書けたのは、27人中8人（29%）だった。他は「して」2人、「しちゃ」2人、「先」3人、「しちゃって」「さし」「しゃき」「ちして」「しゃ」「じゃ」「する」がそれぞれ1人ずつ、そして「出席いただくわ」と、「させて」がないものが5人であった。文脈があるので、だれがだれの結婚式に出席するかは明白であり、授業の中で内容理解チェックをした時も、全員が分かっていた。従って、正しい理解はされている。学生は「出席させて」のつもりで、「して」や「しちゃ」といった上記の形を書いた、ということになるが、これを単純な表記の誤りとすることはできない。特に、誰が動作を行なうのかというヴォイス部分の表記の場合、文の理解とは、正しい表記が伴ったものであるべきだと考える。「出席して」や「出席しちゃ」と書いて、この文を理解したとは言えない。

一方、テ形の活用の誤りで、「帰ってこない」を「帰てこない」と書いた場合、「帰って」以外の他の意味であることはない。こちらは、いわば単純な表記の誤りと言えるが、しかし「帰って」という正しい表記とともに理解されるべきである点は、上の場合と同じだと考える。

これを支持する理由は、母語話者は間違えないであろうということである。意味の理解ができていれば、表記ができなくともいいではないかという議論も成り立つであろう。しかし、我々は聞いたことを頭の中で正確に再構築できるがゆえに、耳に入ってくる音声、一字一句に注意を向けることもなく、またそれをそのまま統語論のレベルで記憶することもない。しかし、学習者が何度も繰り返し聞いてディクテーションした結果、上述のように書いたということは、正確な理解ができていないし、かつ聞いたことを日本語で再構築できないことを示唆すると考えられる。なぜなら、自らが理解していることしか、また理解しているようにしか聞けないからである。

3. 方 法

3.1 方 法

学生に、未習と思われる語彙を語彙リストで予め与え、テレビ番組からとった「生」の音声テープを渡し、何度でも繰り返し聞いてよいとして、スクリプトの部分ディクテーションをさせた。部分ディクテーションは、次に示すような文法項目部分を中心にさせた（資料参照）。

- 1) 手を合わせて頼まれたんじゃ、いやとは言えないだろう。
- 2) ま、それはおめでとう。もちろん出席させていただくわ。

スクリプト全部ではなく部分ディクテーションにしたのは、以下の理由による。聴解力を支えるもの

として、音声、文法、語彙の各言語知識、そして背景知識等の非言語知識が考えられるが、このうち、語彙知識の有無が聴解に大きく影響することは言うまでもない。ディクテーションの研究において、語彙の認知度が低いことは指摘されている（新屋1993）。また、語彙は無限であり、聞くテキストによって左右されるものであるため、限られている文法および音声面における聴解の様子（学習者がどのように聞いているか）を見ることは、聴解教育に有用であると考えられるからである。

ディクテーションの結果を、筆者がディクテーションしたもの⁽¹⁾と照らし合わせ、不一致の部分を「誤り」とした。ただし、次のような表記の違いは無視した。

- 1) 「買ってやるからな」を「買ってやるからなあ」としたもの。
- 2) 「ほうきを持たされんのさ」を「持たされるのさ」としたもの。
- 3) 「いいなっていつも思う」を「いいなといつも思う」としたもの。

ディクテーションは、授業後の宿題として課した。授業の手順は、授業前に、語彙リストを配布しておき、授業の中では、1) 語彙リストの確認をしてから、2) ビデオを視聴しながら内容理解チェックを行い、同時に、社会、文化等、背景にあるものの説明、そして、3) 必要に応じて、文法および表現等を取り上げる、という手順で行った。

3. 2 対象

学生は、筑波大学留学生センター日本語補講コースの聴解Ⅱクラスの受講者で、これはプレースメントテストを受けて、聴解Ⅱおよび聴解Ⅲにプレースされた者（日本語のレベルは中上級）である。全員が大学院生および大学院研究生、そして日本文化研究生（学部生）で、国籍は、中国、台湾、韓国が多く、その他のアジア諸国、欧米、南米等である。人数は、出席者が約40人で、そのうちの宿題提出者は約27人であった。

3. 3 使用教材

テレビ番組「サザエさん」1993年放送の6話。

1回の長さは7分程度で、話の速度は1分間に平均80文節である。

まんがの「サザエさん」を取って教材として取り上げたのは、学生の要望があったからであるが、日常使われる表現が聞き取れるようになりたいという目的にかなったものであった。

4. 誤りの分析

4. 1 データの分類

部分ディクテーションをさせたデータを、まず品詞によって分けた。ただし、述語部分は、動詞、形容詞、名詞+判定詞「だ」を核として、様々な文法カテゴリーが組み合わさって構成されている。そこで、動詞、形容詞、判定詞、助動詞については、述語成分⁽²⁾としてまとめ、その中でさらに文法カテゴリーに分けて、見ていく。

1. 名詞 2. 副詞 3. 指示詞・疑問詞 4. 助詞 5. 述語成分(動詞、形容詞、助動詞、判定詞)

4. 2 分析の結果

4. 1で分類した、品詞および文法カテゴリーによって取り出した部分ディクテーションのデータについて、正答率を出した。なお、正答率の計算にあたっては、当該の文法項目部分さえ正しければ、正答とした。

4. 2. 1 名詞および副詞

名詞、副詞といった内容語については、語彙リストが与えられているため、正答率は高かった。しかし、学生が知っているであろうと考え、語彙リストに載せなかった語で誤りが多かったのは、次のようなものである。

1) 動詞あるいは形容詞から派生した名詞

- (1) いつも恥ずかしい思いをさせられたからね。 正答 16/27人 (59%)
- (2) かわいさに変わりはない。 正答 それぞれ10/22人 (45%)、16/22人 (73%)

具体的にどのように聞いているかを、(1)について見てみよう。

「おもえ」2/27人、「思うよ」1/27人、「思うよう」2/27人、「おもよう」2/27人、「おもおよ」1/27人、「おもよ」1/27人、「思い出」1/27人、「思」1/27人となっている。「思い/思う」という実質的意味はみな分かっているようだが、名詞ではなく動詞に聞ってしまう学生がいる。

2) 音声面において無声化や音の融合などが起きている場合

- (1) □では言わなくても態度に出るんだよね。 正答 12/27人 (44%)
- (2) あんたって子は、心配させて。 正答 3/27人 (11%)

(1)のように、それが文頭の語の場合より困難である。(2)は、前の「あんたって」の「って」の難しさも加わって、「子は」が聞き取れたのは、27人中わずか3人で、他は「こう」1人、「こわい」5人、「くあ」1人、「で」1人、無答16人であった。

3) 語彙リストにはあるが親密度が低い語

- (1) 財産はもらえるし、 正答 13/23人 (56%)

(2) 取り合いしてワカメを泣かすもんだから 正答 12/22人 (54%)

これらは、(2)の「取り合いして」を「とりあえず」のように、より親密度の高い語に聞いてしまう様子が見られた。

4. 2. 2 指示詞・疑問詞

「これ」「この」類はよくできているが、「こんな(に)」類が難しい。

(1) ほくもあんなに話せるとは思わなかった。

「あんなに」ができたのは27人中13人で、無答が9人、「あまり」「あまり」「まんなかに」「まんなかに」「な」が1人ずつであった。

4. 2. 3 助詞

助詞は、1) 格助詞、2) 取り立て助詞、3) 接続助詞、4) 終助詞に分けて、見ていく。

1) 格助詞

格助詞は全体として正答率が高かった。正答率の低かったものを見ると、他の助詞との混同、あるいは、音声連続などの困難が生じた場合のようである。

「が」については「は」との混同が多く、「を」については、無答(「を」が聞こえていない)が多かった。「を」は話し言葉では省略されることが多いが、ディクテーションをさせた箇所は、前後にポーズがなかったり、ピッチに変化がなかったりして、「を」が必要な箇所である((5)(6)参照)が、学生はそういった韻律的特徴を聞き取れないでいる。

以下に、データに現れた格助詞「が」「を」「に」について、正答率の高かったもの低かったもの両方を挙げる。

(1) すてきなお姉さんがいたらって思わない。

27人中、正答21人(78%)、「か」1人(4%)、「って」1人、「に」1人、無答3人(11%)

(2) ほくがいいって断わったんです。

27人中、正答12人(44%)、「は」10人、「わ」1人、無答4人

(3) けんかが起こるはずないじゃないの。

27人中、正答10人(37%)、「を」6人、無答10人、他と融合してしまっているもの1人

(4) いくら人助けでもうそをついたりしてはね。

27人中、正答19人(70%)、無答7人、他と融合してしまっているもの1人

(5) ご感想をうかがいたくて。

27人中、正答13人（48%）、無答14人（52%）

- (6) タラちゃんのを借りてるんだよ。

27人中、正答3人（11%）、「のを→に」3人（11%）、無答21人（78%）

- (7) お兄ちゃん、遊びにに出てったわよ。

27人中、正答26人（96%）、無答1人（4%）

- (8) さっそくお祝いに行かなきゃいかんだろう。

26人中、正答19人（73%）、無答7人（27%）

- (9) お兄ちゃんにも責任があるんだから。

27人中、正答15人（55%）、「が」10人（37%）、無答2人（7%）

2) 取り立て助詞

- ① 「は」

- 「が→は」

- (1) ほくは先に行くよ。

27人中、正答20人（74%）、「が」7人（26%）

- 「を→は」

- (2) 宿題はちゃんとやってけばいいんだから。

27人中、正答12人（44%）、「を」11人（41%）、無答4人（15%）

- (3) 宿題はやってあんでしょね。

27人中、正答7人（26%）、「を」13人（48%）、無答7人（26%）

- 「と+は」

- (4) あんなに話せるとは思わなかった。

27人中、正答4人（15%）、無答20人（74%）、他と融合してしまっているもの3人（11%）

- (5) いやとは言えないだろう。

27人中、正答22人（81%）、「わ」1人（4%）、無答4人（15%）

- 「に+は」

- (6) 弟にはならないのよ。

26人中、正答12人（46%）、無答8人（31%）、「には→が」3人（11%）、「には→と」2人（8%）、「には→の」1人（4%）

- 「～は～だ」

- (7) 姉さんは別だよ。

22人中、正答3人（14%）、無答19人（86%）

- (8) 長電話は姉さんだって、みんな知ってるよ。

27人中、正答11人（41%）、「が」3人（11%）、無答13人（48%）

○省略があり文末にきている「は」

(9) いやあ、別にそんなことは。

27人中、正答14人(56%)、「わ」7人(26%)、「が」1人(4%)、「や」1人、無答4人(15%)

② 「も」

(1) マスオ君も大変だな。

23人中、正答13人(56%)、「もう」1人(4%)、「は」1人、無答7人(30%)
他と融合してしまっているもの1人

③ 「なんて」

よくできている場合で、正答率59%である。「なんて」を認知できず、「なんで」「なって」のように誤っている。

(1) 答え合わせなんて必要ないんだよ。

27人中、正答11人(42%)、「なって」2人(7%)、「なく」2人、「なおす」2人、「は」1人、「たんで」1人、無答7人(26%)

(2) うちを出るなんて言い出しましてね。

22人中、正答10人(57%)、「なんで」2人、「何で」1人(5%)、「なって」3人(14%)、「なんって」1人、「と」1人、「って」1人、無答3人

(3) 学校から帰ってすぐ机に向かうなんて感心ね。

22人中、正答6人(28%)、「なんで」1人(5%)、「なって」4人(18%)、「になって」3人(14%)、「なて」1人、「なんって」1人、「から」1人、「向かって」4人、無答1人

④ 「って」

「って」は、話し言葉で非常によく用いられる。「って」の働きによって以下のように分け、それぞれ見る。

○「と→って」

「って」ではなく「と」と表記しているものも正答とした。数がそれほど多くないので、全例について正答率のみ挙げるが、誤りの多くは「て」と聞いているものである。

(2)では「って」を「て」と聞いてしまった誤りが、後続の動詞にまで影響し、「言う」を「いる」としている(「会わせてくれている」)のも15%あった。

(1) 明るいうちにやっちゃいなさいって言うんだらう。

27人中、正答22人(81%)、「て」2人(7%)、無答3人(11%)

(2) 両親にもぜひ会わせてくれって言うんです。

27人中、正答11人(41%)、「て」12人(44%)、「ってん」1人(4%)、無答3人(11%)

その他のものについては、「言う」の前接部分を挙げておく(数字は正答数)。

「お茶でもって」15/24人、「見てあげようって」25/27人、「いけないって」15/27人、「いって」23/27人。

次に、動詞が「言う」以外の引用動詞の場合を見る。

(3) 一番の長電話は姉さんだって、みんな知ってるのに。

27人中、正答19人(70%)、「て」3人(11%)、「った」1人(4%)、無答4人(15%)

(4) ほかのことだと何でもほくって決めてかかるんだから。

27人中、正答5人(18%)、「て」4人(15%)、「で」8人(30%)、「に」2人(7%)、「の」2人、「が」1人(4%)、「を」1人(4%)、無答4人(15%)

その他の動詞の場合を見ると、以下のようになっている(数字は正答数)。

「決まる」12/22人、「断わる」17/27人、「反省する」10/22人、「思う」19/27人、18/27人。

○「と(言う/思う)→って」

(1) 買ってくれってねだったりしませんでしたから…。 正答2/26人(8%)

後続の「ねだったり」の難しさも影響しているかもしれないが、正答率が非常に低かった。「くれてねたり」が9人、他は「くれる」「くれた」「くれたり」「くれてる」などである。

(2) 兄貴がもう小さいからってくれたんだ。

27人中、正答7人(26%)、無答20人(63%)

無答のうちの19人は、「小さいからくれた」というように「って」が抜けているもので、これは「小さいからくれた」でも一応意味が通じることもあり、困難だったようだ。他の1人は「小さいだから」であった。

○「という→って」

(1) 怒るってことは、それだけ心配してるってことだろう。

27人中、正答17人(63%)、正答6人(22%)

「て」4人(15%)、「で」1人 「と」4人(15%)、「て」1人(4%)

無答3人 (11%)

「っという」1人、無答15人 (56%)

その他は「タラちゃんってわけ」11/26人、「特別ってことは」12/27人、「めしあがってってってこと」1/24人、「あんたって子は」3/27人であった。

○「っというのは→って」

(1) いいことって続くもんね。

26人中、正答3人 (11%)、「て」7人 (27%)、「で」7人、「と」1人 (4%)、「を」1人、無答7人 (27%)

○提題

(1) あたしってそんなにうるさい姉かしら。

27人中、正答14人 (52%)、「て」4人 (15%)、「で」2人 (7%)、無答7人 (26%)

その他は「フグ田さんって」17/27人、「ひとみさんって」12/27人であった。

○承前 (問い返し)

(1) A: どういうわけなの。

B: どういうわけって、別に。

27人中、正答10人 (37%)、「て」2人 (4%)、「で」2人 (7%)、「た」3人 (11%)、「たん」3人、「だ」4人 (15%)、「か」2人、無答1人 (4%)

その他は「ほしいって」16/27人、「どこって」23/27人、「ためって」17/21人であった。

○伝聞

(1) パックをしてたんですって。

27人中、正答22人 (81%)、「て」3人 (11%)、「で」1人 (4%)、「でして」1人

「って」の機能によって7つに分けたが、正答率を見ると、2番目の「言う/思う」がいわば省略されていると考えられる場合が、最も困難なことが分かる。その他のものについては、「って」の前接形による。「って」そのものが聞き取りにくいものであり、加えて、3)の「めしあがってってって」のように、ここで問題になっている「って」の前接形に「って」が2つ続いていると、「めしあがる」という実質的意味の把握が精一杯のようだ。

3) 接続助詞

活用形に助詞などが付いて複文を構成するもの (例えば、～たら、～ても) もここに含める。

① 「と」「たら」「ば」

- (1) 他のことだと何でもほくって、決めてかかるんだから。
- (2) 何にも言われないと、かえって不安になってくる。

(1)「と」は27人中5人(18%)しかできていなかった。「他のことだ」だけで「と」を落としているのが12人いる。(2)では、27人中17人(63%)であるが、やはり「と」を聞き落としているのが6人、また「言われなくて」にしているのが4人いた。

他の、条件節を作る「たら」「ば」については、よくできていた。

② 「たって」

- (1) これじゃ、やろうとしたってやりたくなくなるよ。

「やろうとしたって」ができたのは27人中5人(18%)だった(1人は「やろうとしても」)。他は、「やろうしたら」4人、「やろうとした」3人、「やろうとして」1人、「やるとしたと」1人、「やろうと」6人、「やろうとい」「やろうとしゃつ」「やるとしゃつ」「やろうときき」「やるとし」「やると」「やろうどうしたら」「やる気がなくなるだろう」が各1人ずつであった。

4) 終助詞

「ね」を「よ」あるいは「な」にする誤り、「わ」と「は」の混同が見られた。また、次のように「のだ」などと連続している場合、「の」あるいは「よ」の一方しか聞こえていないようだ。両方とも聞き取れていない者もいるが、「よ」を落としている場合が多い。

- (1) 何やってんのよ。

27人中、正答6人(22%)、「お」1人(4%)、「か」1人、「かな」1人、無答16(59%)

4. 4. 4 述語成分

動詞、形容詞、助動詞、判定詞は、実際に使用されている形で、1) ヴォイス、2) アスペクト、3) 授受、4) ムードに下位分類し、その中でさらに、文法項目を拾い上げた。

1) ヴォイス

- ①可能、②受身、③使役、④使役受身について正答率を調べた。

① 可能

可能は非常によくできていた。全13例のうち正答率90%以上というのが6例あり、70%以上で見ると10例になる。ただし、これらはみな辞書形およびナイ形(「～ない」という非過去の形)である。

正答率の低かった3例は、「～てもらえないかな」(正答率48%)という依頼表現、「食べらんなかった」(37%)という、可能形部分に音声変化が起きているもの、そして「持てそうだ」(7%)と

いう、ムード表現「そうだ」につながっているものだった。「持てそうだ」を見てみよう。

(1) 今度の宝くじは、希望が持てそうだぞ。

「持てそうだ」ができたのは27人のうち1人だけで、「もってそうだ」1人、「もったそうだ」2人、「もてるそうだ」1人、「もってるそうだ」6人、「もっていそうだ」1人、「もってるんだ」1人、「まつだ」1人となっている。「持つ」は「持っている」という形が学習の早い段階で習得されるからか、ここでも学習者にとってより親密度の高い「持って」と聞いてしまっているのが見られる。

② 受身

受身は8例あったが、その平均正答率は85%と悪くない。誤っている場合に、どう聞いているかを見てもみると、能動あるいは使役に聞いている。

③ 使役

「心配させて」96%、「会わせてくれって」89%が正答率が高かったのに対し、「出席させていたたくわ」が30%であった。これは、音声上の困難が加わっているためと考えられる。第2節で「出席させて」の具体的な誤りを挙げたが、使役よりも、むしろ能動に聞いてしまっているのが分かる。

④ 使役受身

使役受身は3例あり、「させられた」74%、「買わされた」50%に対し、「持たされんのさ（持たされるのさ）」が15%と、極端に低いのは、音声上の理由によると考えられる。また、「持つ」を「持つて／持った」の形に結び付けてしまう傾向が、可能形の場合と同様、ここでも見られる。

(1) 僕がほうきを持たされんのさ。

「持たされんのさ（持たされるのさ）」ができたのは26人中4人で、あとは、「もったされるのさ」4人、「もたさるんのさ」2人、「もたさなんのさ」2人、「もたされるんのさ」、「もたさるんのさ」、「もたさらんそう」、「もたさのさ」、「もたさのなさ」、「もたせれるのさ」、「もたさせるのさ」、「もったさるんさ」、「もったされるんなさ」、「もったさらにのさ」、「もったさるそうさ」、「もったろうさ」、「もっていたさるんさ」、「ものだすのさ」である。

2) アスペクト

① 「ている」

話し言葉では、「～ている」は「～てる」になることが多い。「～てた」の場合、同じ／t／が続く

ので難しく、「て」を聞き落としてしまう。具体例を1つ見てみよう。

(1) 話をしたんだったわね。

「したた」ができたのは、26人中1人だけだった。大半が「した〜」と聞いている。「したたんだた」、「したんだった」5人、「したんだた」「したんだ」2人、「したったんだ」、「したっだん」、「したんだとう」、「したいんだった」、「した」、「しゅうたんだから」、「しゅうだんたった」、「おしえたんだった」、「おしえたんたった」、「おしえたんだ」3人、「おしえだった」3人、「言いながら中止だった」となっている。

② 「てくる」「ていく」

「てくる」については(1)の「入ってきた」以外は、「〜て」の活用を除いて非常によくできていた。

(1) あたしが入ってきたところに、ワカメがぶつかってきたんだもの。

「入ってきた」とできたのは27人中6人で、「入てきた」1人、「入ってた」4人、「入っていた」2人、「入ていた」4人、「入ていった」1人、「入って」1人、「入ていて」1人、「入てた」1人、「入たきた」1人、「入った」2人、「入ったん」1人、「入ってる」2人となっている。

「てくる」に比べ、「ていく」は誤りが多かった。「ていく」は、話し言葉では「い」が脱落することが多く、それが様々な形で使われたときに、「ていく」を認知できないためと考えられる。

(2) お兄ちゃん、遊びに出でったわよ。

「出でった(出でいった)」ができたのは27人中6人で、「でていった」1人、「でていた」3人、「でてた」4人、あとは各1人ずつであった。「ででいた」「てていた」「でった」「でてだ」「でてだ」「でた」「でたっ」「てでた」「でてる」「でたほう」「行てた」「ていった」「て」。

(3) 宿題はちゃんとやっけばいいんだから。

「やっけば(やっけいけば)」ができたのは27人中16人で、「やっとけば」3人、「やけば」2人、「やっけば」1人、「やてけてば」1人、「やって」1人、「やってきた」1人、「やっでけ」1人、該当部分無答が1人であった。

興味深いのは、「やってく」と「やっとく」との混同である。

やっておく → やっとく

やっていく → やってく

学生はそこに音声の縮約があるということは分かっているが、似ているために混同が起きるのだと考えられる。

③ 「てある」

「てある」2例は、「言っている」29%、「やっであんでしょ」0%というように、正答率が低かった。音声融合が起きて、「てある」が「たる」に聞こえることが原因していると思われる。

(1) 長電話はいけないって言てあるだろう

「いったある」2人、「いっている」1人、「いった」6人、「いったん」2人、「いって」1人、「いたる」2人、「いっついん」1人、「いい」1人、「いけなる」1人、「いたい」1人となっている。

(2) ちゃんと宿題はやってあんでしょね。

これは、「やっである+んでしょ」「る」が「ん」になって「んでしょ」と融合しているため、困難さがいっそう増している。「やったある」2人、「やったあつ」1人、「やったあつて」1人、「やんたある」1人、「やった」22人となっている。

④ 「ておく」

「ておく」は2例あり、「目を通しておいてもらおう」59%、「やめといたほうがいい」52%であった。見やすいように、誤りをタテに並べて記す。このように、文法項目が複合されている場合、そのうちのどれか1つしか（この場合は「とおしておく」か「とおしてもらおう」）聞き取れないことがよくある。

(1) 目をとおしておいてらおうと思いましてね。(6/27人)

とおして	もらおう	(3人)
とおしておいて	もらう	(9人)
とおしておいて	もらお	(1人)
とおして	もらう	(2人)
とおし	もらう	(1人)
とおして	もらい	(1人)
とおして	もらいました	(2人)
目おど	もらう	(1人)
とうりました		(1人)

⑤ 「てみる」

「てみる」はいずれも正答率が非常によかった。

⑥ 「てしまう」

「てしまう」は、縮約形の「ちゃう」での使用が多かった。「ちゃう」が「てしまう」であることは、学習者によく知られているが、正しい表記が困難である様子が見える。「持ってきちゃった」を「持ってきちゃた」と「っ」を落としてしまう誤りが多い。また、「ちゃって」「ちゃった」という形はよくできているが、「ちゃいなさい」のように別の文型に続くと、正答率が下がる。

(1) 明るいうちに、やっちゃいなさい、って言うんだろ。(正答率29%)

「やっていなさい」3人、「やってなさい」4人、「やっしやいなさい」「やっていっじやなさい」「やっちなさい」「やっちなさい」「やっちやっとなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」「やっちやいなさい」無答が1人ずつである。

3) 授 受

① 「てあげる」

「てあげる」が縮約されて「たげる」になってくると、正答率が落ちる。テープを聞くと、「てあげる」が明瞭に聞こえるときは(「つきあってあげる」61%、「見せてあげよう」85%)正答率が比較的高いのに対し、「やったげなさい」29%のように縮約されていると、正答率が落ちる。

② 「てくれる」

いずれも非常に正答率が良かった。

③ 「てもらう」

「なってもらいたい」は正答率が81%と良かったが、「連れてってもらった」「通しておいてもらおう」については、この文節全体ができている者は少ない。「てもら(う)」の部分だけの正答率は、それぞれ61%、89%と悪くない。

④ 「ていただく」

「てもらう」の正答率が良かったのに比べ、「ていただく」は、最もできていた「出席させていただく」(下線部のみができている)が44%で、「来ていただいている」19%、「つきあっていただいた」8%は落ち込んでいる。「ていただく」という形では正しく書いても、活用されていると、不正確になってしまう。

「来ていただいてるんだもの」（あるいは「いただいでいる）」と正しく書けたのは、26人中5人で27%だった。その他は、「いただいでる」「いただいってる」「いただいたいる」「いただける」「いただきている」「いたたいてる」「いたたいる」「いただいんどうろう」「いただる」「いただいた」「いたたいた」「いたたった」「いただけいた」「いたたきにいる」「いただきたい」であった。おそらくほとんどの学生が、「ていただく」が活用されていることまでは分かっているのだが、正確には分かっているようだ。

4) ムード

① 「ようだ」「みたいだ」「そうだ（様態）」「そうだ（伝聞）」

これら自体は非常によくできていたが、前接の活用に誤りが見られるものがある。たとえば、1) ヴォイス①可能のところで見つかった例がある。

(1) 希望が持てそうぞ。

② 「のだ」

話し言葉のいたるところに出てくるが、学生は「の（ん）」があるところで聞けない一方で、ないところに「の（ん）」を入れてしまう傾向が見られる。

また次のように音連続が生じている場合、「やってのよ」のように「やってんの」の「の」は認知しても「ん（る）」を認知できていなかったり、また「やってるん」のように、「やってる」は認知しても後続部分で失敗してしまったりする。

(1) 何やってんのよ。

27人中、正答14人（52%）、「め」1人（4%）、「ん」3人（11%）、「かな」1人、「か」1人、無答7人（26%）

③ 「～がる」

「～がる」は2例あり、「はずかしがる」23%、「かわいがる」45%ともに、誤りが多かった。

(1) そんなにはずかしがることないわよ。

「はずかしがる」ができたのは22人中5人で、「はずかしいがる」1人、「はずかしい」8人、「はつかしい」2人、「はずかしいある」1人、「はずかしいから」1人、「はずかしから」1人、「はずしから」1人、「はじかし」1人、「はずかい」1人であった。

④ 「なきやいい」

(1) よけいなこと、言わなきやよかった。

「言わなきや（言わなければ、言わなけりや）」は27人中7人（26%）、「いわなけば」「いわなっきゃ」「言わなけきゃ」「いわなくて」「いわなくちゃ」「言わなけてや」「いわないかじゃ」「言け

なけれど」「言えないのが」「いわゆる」「いわないちゃ」「いわなけやる」「答えてなければ」が各1人ずつ、無答が7人だった。

「なきゃ」の部分は「なければならぬ」の縮約形と形は同じであるが、「なければならぬ」の縮約形「なきゃ／なくちゃ」が、平均で正答率57%であるのに比べ、低かった。ただし1例だけなので、一般化はできない。

5. 音声面から見た誤り

前節では、品詞および文法カテゴリーごとに誤りを見てきたが、ここで、これら文法面の下位分類を超えてながめてみよう。

聴解のメカニズムは、次のようになっていると考えられる。

① 音連続を受容 → ② 音韻として把握 → ③ 意味のある単位に切って、それぞれを意味と結び付ける → ④ 文レベルあるいはテキスト全体の内容を理解

②では音韻の知識が必要であり、③では音韻（韻律的要素）、文法、語彙知識が必要である。

③におけるプロセスが最も困難であると考えられるが、音声、文法、語彙知識の中で、語彙知識の有無は、③ひいては④の成功に大きく関与する。未知語あるいは既習語であってもその認知に失敗した場合、正しい区切りができず、その結果、意味理解が成功しないことになる。

一方、自然な話し方では、音声は変化したり、前後で融合したりしてくずれる。それを正しく認知するためには、音声知識に支えられた処理能力が必要である。

次の例を見てみよう。

(1) ね、そう思わない、とうさん。

「思わない」ができたのは、27人中12人であった。

他は、「思わないと」のように、後続の「とうさん」の「と」をくっつけてしまったり（6人）、「そう」と、「思う」の「お」とが融合しているために「思う」を聞き取れないでいるのが目立った。具体的には「もわないと」「まわない」「うまない」「まない」3人、「まないと」2人、「うまい」「うない」「まんない」「ない」となっている。

(2) 週刊誌を買おうかと思ってね。

(3) もう何とも思っていないよ。

(2)の「と思って」を、「ともって」（漢字で「持って」としているのもあった）あるいは「ともった」と聞いているのが、27人中6人いる。

また(3)でも、「思っていない」が聞き取れたのは22人中7人で、残りは「もって」あるいは「もて」であった。

6. まとめ

以上、聴解のディクテーションから見てきたことを、文法面、音声面あわせてここにまとめる。

1) 文法力の弱い学習者ほど、音声を優先させてしまう。

意味が通じなくとも、聞こえたとおりに、そのままひらがなで文字を連ねる。

2) より親密度の高い語・表現に聞いてしまう。

3) 言葉の実質の意味は聞き取れても、文法的意味が不正確である。

4) 文法項目が複合した場合、どちらか一方しか認知できないことが多い。

5) 音声処理能力（たとえば、音変化、音連続等の音声的なくずれを元通り修正できる）が弱いため、文法的に誤りであっても、そのままを頭の中で再現してしまう。

たとえば、次の「口をお出しにならないほうが」というのを見てみよう。

「口をお出しにならない」ができたのは、27人中2人だけであった。

「を」と「お」で音声連続が起きているが、この/o/という音声を「口を」と聞いた学生は「出し〜」のように「お」を聞いておらず、一方「お出し〜」に聞いた学生は助詞「を」を聞いていない。文法能力と音声処理能力の双方を活用することによって、正確な理解にいたると考える。

あまり	<u>口を</u>	<u>お出しにならない</u>	ほうが。
	口を	出し ならない	(14/27人)
	こちょ	出し ならない	(1/27人)
	口が	出し ならない	(1/27人)
	口を	出してならない	(1/27人)
	口を	出さない	(3/27人)
	口に	お出しにならない	(1/27人)
	口を	お出しりならない	(1/27人)
	口×	お出さらない	(1/27人)
	口を	出したならない	(1/27人)
		くじょうしんならない	(1/27人)

本稿は、限られたテキストの聴解の部分ディクテーションをもとにした「誤り」分析であり、全てを網羅しているとは言えないものではあるが、しかし、ある程度の傾向は窺えると思われる。

日本語能力の低い学習者ほど、実質の意味は把握できても、文法的意味を捉えられない様子が見える。実質の意味が理解できれば、大まかな内容を掴むことは可能であろうが、誤解を生じる可能性も多々ある。

聴解教育においては、大まかな意味を把握させることの一方で、正確さを要求することが同時に必要

である。上の5)に述べた音声処理能力を高める一方で、文法力を養成することにより、頭で聞くようにする訓練をすることが必要だと考える。

注

- (1) 実際の話し言葉は、音声融合したりくずれたりして、母語話者でも何を言っているのかわからない部分があるが、本研究で分析の対象とした『サザエさん』はスクリプトのあるものなので、ディクテーションに際してそのような困難はなかった。
- (2) 野田(1989)の文構成の考え方による。

参考文献

1. 笈寿雄 他(1979)「誤聴分析」『大学英語教育学会紀要』10
2. 小池生夫 編(1993)『英語のヒアリングとその指導』大修館書店
3. 新屋映子(1993)「日本語中上級学習者の聴解能力について」『日本語教育』79:126-136
4. 中込明子(1995)「ディクテーションの誤答分析から見た聞き取りの研究—中上級日本語学習者を対象として—」The 6th Conference on Second Language Research in Japan における発表
5. 野田尚史(1989)「文構成」『講座 日本語と日本語教育』第1巻 明治書院
6. フォード順子(1992)「聴解ディクテーションの「誤聴」分析—中・上級の文法の困難点を探る—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』7:45-64
7. 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法』くろしお出版
8. 山本富美子(1994)「上級聴解力を支える下位知識の分析」『日本語教育』82:34-46
9. 吉田一衛 編(1984)『英語のリスニング』大修館書店

[資料] 下線部がディクテーションをさせる箇所である。

サザエさん【何かいいことありそう】

サザエ：あら、茶柱が立ってる。何かいいことありそう。

サザエ：まあ、黄身が二つ。んーらららららんらん。

郵便屋：磯野さん、郵便ですよ。

サザエ：あ、ご苦労様。

カツオ：姉さん、どこから来たの？

サザエ：あらー。はい、カツオ。

カツオ：は？ どうして僕がほうきを持たされんのさ。

舟： 「この度、無事男の子を出産いたしました。親子ともに元気です。」まあ、男の子が生まれたんだね、すみえさん。

サザエ：おめでたい話が舞い込んできたもんだわ。

舟：ほんとだね。

サザエ：何かいいことありそうだなあとと思ったら、このことだったんだわ。

波平：ほー、生まれたのか。

舟：ええ。

波平：そりゃめでたいな。早速お祝いに行きなきゃいかんだろう。

舟：そうですね。

サザエ：ねえ、あたしに行かせて。

タラちゃんが生まれた時に来ていただいているんだもの。

マスオ：あ、そうだったね。

ワカメ：あたし、タラちゃんが生まれた時のこと、覚えてるわ。

タラオ：ぼくが生まれた時ですか。

ワカメ：うん、マスオ兄さんに連れてってもらったんだもん。

マスオ：ほら、あれがそうだよ。

ワカメ：ねえ、名前は？

マスオ：残念ながら、まだなんだ。

タラオ：ぼく、名前がなかったんですか。

マスオ：いやー、タラちゃん、まだ生まれたばかりだったからね。

サザエ：パパと二人でいろいろ考えたんだけど、決まらなかったのよ。

波平：一番いい名前にしようと思ったからだよ。

マスオ：サザエ、やっぱりこれにしようよ。

サザエ：そうね。それが一番かわいらしくていい名前だわ。

波平：フグ田タラオか。

舟：いい名前ですね。

カツオ：タラちゃんってわけだね。

ワカメ：かーわいい。

サザエ：それで、タラちゃんの名前が決まったのよ。

タラオ：よかったです。